

HIV 感染症・エイズに関する調査結果

大阪市保健所感染症対策課

1 目的

(1) 現状と課題

大阪市内医療機関から出された HIV 感染症・エイズの発生届出数は、平成 25 年は 179 件であり、前年の 140 件より増加している。平成 25 年に HIV 感染症として発生届出のあった者のうち 30 歳未満が 34.3%、30 歳代が 32.1%を占めており、若い年齢層での感染予防対策が不可欠である。また、日本人男性が 93.8%、推定感染経路が同性間性的接触である者が 74.9%を占めていることから、MSM (Men who have sex with Men: 男性とセックスする男性) の感染予防対策を重点的に図る必要がある。

大阪市では、平成 24 年 3 月に策定した「第 2 次大阪市エイズ対策基本指針—大阪市「STOP エイズ」作戦—」に基づいて施策を推進している。

市民が正しい知識を持ち HIV 感染予防行動がとれるようにするとともに、HIV・エイズに対する偏見・差別をなくすためには、正しい知識の普及啓発が重要である。

(2) 調査の目的

市民に「正しい知識の普及」がどの程度図られているのかを明らかにすることで、事業の推進効果の測定、さらに重点的に普及啓発すべき対象の把握を行い、効果・効率的な事業の展開方法を検討する。

2 調査内容

性別・年齢・HIV 感染症/エイズの知識に関する理解度・相談機関や大阪市内で作成した周知媒体の認知度・HIV 検査受検経験・HIV 検査を受検しやすい時間帯・コンドーム使用経験等

3 調査対象

大阪市内在住の 20 歳以上の男女 500 人

4 調査期間

平成 25 年 2 月 5 日 (水曜日) ～2 月 6 日 (木曜日)

5 調査実施機関

楽天リサーチ株式会社

6 調査方法

インターネットを用いたウェブアンケート調査

倫理的配慮としては、回答に先立ち「本アンケートではあなたの疾患についてお伺いいたします。プライバシーに関わる内容が含まれている場合がございます。」と予め確認し、同意を得たモニターから回答をしてもらった。

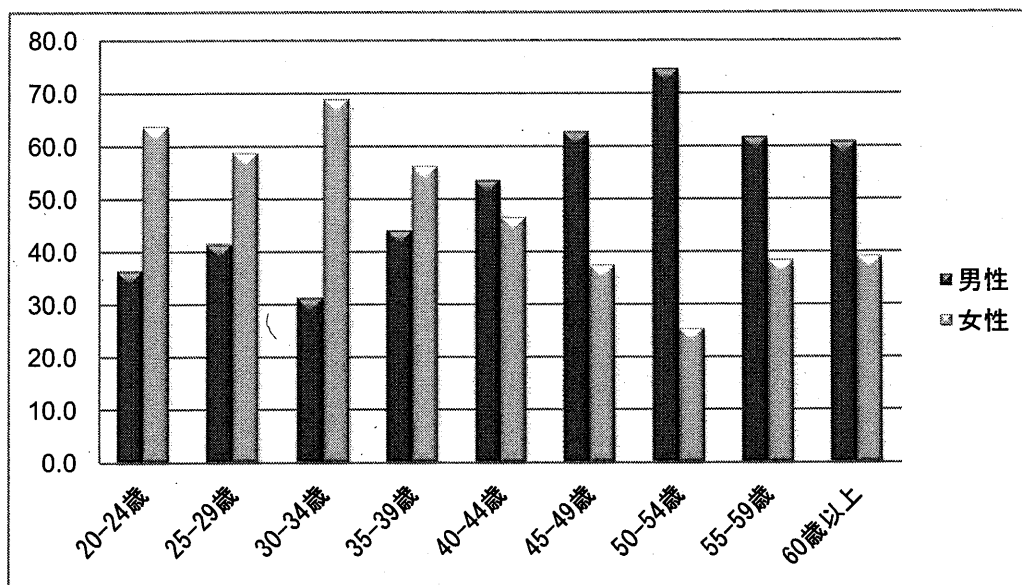
7 結果及び考察

(1) 背景

性別 対象者割合を図 1 に示した。

- ・年齢は平均 45.77 歳 (最年少 20 歳、最年長 77 歳) であった。【問 1】
- ・性別は男性 55.0% (275 人)、女性 45.0% (225 人) であった。【問 2】

図1 性別 対象者割合

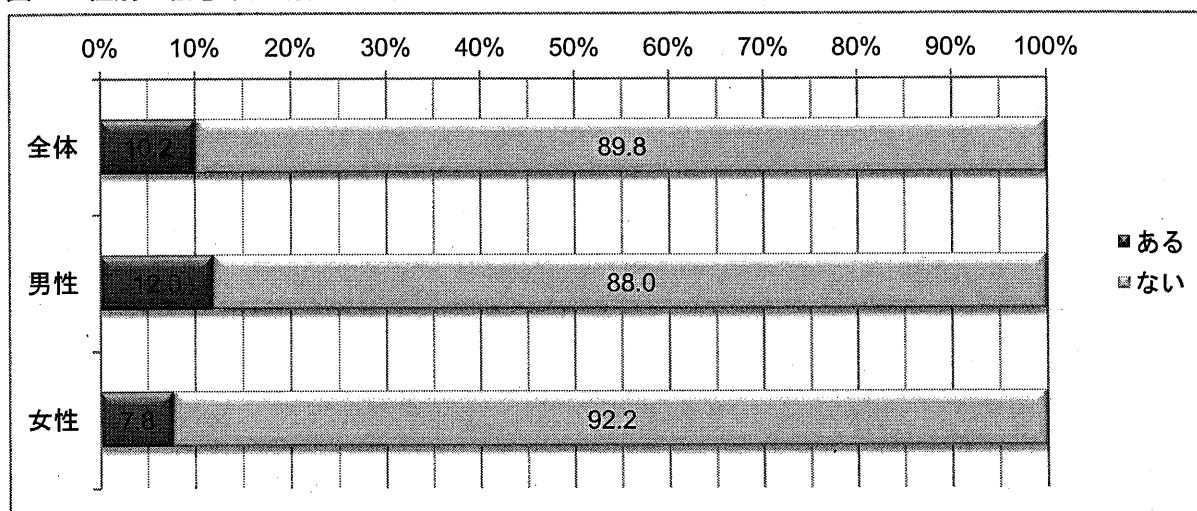


- ・ 性行為経験者の割合は男性で 93.8%、女性で 91.1%であった【問 12】。
- ・ 性行為経験者の性的志向については、男性のうち、男性のみとセックスをしたのは 1.6%、女性のみとセックスをしたのは 96.1%、男性と女性の両方とセックスをしたのは 2.3%であり、MSM (Men who have sex with Men) は 3.9%であった【問 13】。

女性では、男性とのみセックスをしたのは 97.6%、女性とのみセックスをしたのは 1.5%、男性と女性の両方とセックスをしたのは 1.0%であった。

- ・ 性感染症の既往については、図 2 のとおりであった【問 14】。

図2 性別 性感染症既往歴の有無



(2) HIV 感染症/エイズの知識に関する理解度

11 項目について、「正しい」「誤り」「わからない」を選択肢として問うた。正答率は表 1 のとおりであった【問 3】。

表1 HIV 感染症/エイズの知識項目の正答率 ※黄色セルが正答率

問	正しい	誤り	わからない
1.通常の HIV 検査では、感染から2～3ヶ月以上経過しないと、感染しているかどうかわからない	202 人 40.4%	59 人 11.8%	239 人 47.8%
2.HIV 即日検査や郵送検査キットでは、検査結果を確認するため病院などで再度検査が必要になる場合がある	194 人 38.8%	50 人 10.0%	256 人 51.2%
3.性感染症に感染していると、HIV に感染しやすくなる	143 人 28.6%	126 人 25.2%	231 人 46.2%
4.HIV に感染したら、必ずエイズを発症する	33 人 6.6%	336 人 67.2%	131 人 26.2%
5.HIV 感染症は医療の進歩で、服薬を継続することでエイズ発症がコントロールできる病気となった	267 人 53.4%	40 人 8.0%	193 人 38.6%
6.HIV 感染により免疫力が低下すると、さまざまな感染症や悪性腫瘍(がん)にかかりやすくなる	292 人 58.4%	29 人 5.8%	179 人 35.8%
7.現在の HIV 感染症の主な感染経路は性的接触である	279 人 55.8%	96 人 19.2%	125 人 25.0%
8.HIV 検査では、感染して症状が全くない場合でも、精液や膣内分泌液には感染源となるウイルスが含まれている	260 人 52.0%	31 人 6.2%	209 人 41.8%
9.HIV 感染の予防はコンドーム使用が極めて有効である	380 人 76.0%	23 人 4.6%	97 人 19.4%
10.大阪府では昨年一年間の新規 HIV 感染者／エイズ患者の報告数は「2 日に 1 人」の割合である	60 人 12.0%	44 人 8.8%	396 人 79.2%
11.平成 20 年以降、HIV 検査を受けた人は減少している	98 人 19.6%	82 人 16.4%	320 人 64.0%

表2-1 性年代別 表1問1の年代別正答率

	全体	性別		年代								
		男性	女性	20-24 歳	25-29 歳	30-34 歳	35-39 歳	40-44 歳	45-49 歳	50-54 歳	55-59 歳	60 歳 以上
人数	500 人	275 人	225 人	11 人	29 人	48 人	66 人	84 人	83 人	63 人	47 人	69 人
正しい	40.4%	45.1%	34.7%	18.2%	27.6%	37.5%	33.3%	35.7%	47.0%	44.4%	46.8%	47.8%
誤り	11.8%	10.2%	13.8%	18.2%	10.3%	12.5%	16.7%	13.1%	12.0%	9.5%	6.4%	10.1%
わからない	47.8%	44.7%	51.6%	63.6%	62.1%	50.0%	50.0%	51.2%	41.0%	46.0%	46.8%	42.0%

表 2-2 性年代別 表 1 問 8 の年代別正答率

	全体	性別		年代								
		男性	女性	20-24 歳	25-29 歳	30-34 歳	35-39 歳	40-44 歳	45-49 歳	50-54 歳	55-59 歳	60 歳 以上
人数	500 人	275 人	225 人	11 人	29 人	48 人	66 人	84 人	83 人	63 人	47 人	69 人
正しい	52.0%	50.2%	54.2%	36.4%	44.8%	45.8%	54.5%	48.8%	50.6%	54.0%	61.7%	56.5%
誤り	6.2%	6.9%	5.3%	9.1%	13.8%	8.3%	6.1%	6.0%	4.8%	9.5%	4.3%	1.4%
わからない	41.8%	42.9%	40.4%	54.5%	41.4%	45.8%	39.4%	45.2%	44.6%	36.5%	34.0%	42.0%

表 2-3 性年代別 表 1 問 9 の年代別正答率

	全体	性別		年代								
		男性	女性	20-24 歳	25-29 歳	30-34 歳	35-39 歳	40-44 歳	45-49 歳	50-54 歳	55-59 歳	60 歳 以上
人数	500 人	275 人	225 人	11 人	29 人	48 人	66 人	84 人	83 人	63 人	47 人	69 人
正しい	76.0%	74.2%	78.2%	63.6%	79.3%	70.8%	75.8%	75.0%	77.1%	84.1%	76.6%	72.5%
誤り	4.6%	4.4%	4.9%	9.1%	0.0%	8.3%	4.5%	6.0%	4.8%	3.2%	2.1%	4.3%
わからない	19.4%	21.5%	16.9%	27.3%	20.7%	20.8%	19.7%	19.0%	18.1%	12.7%	21.3%	23.2%

正答率が低かったのは、「10. 大阪府では昨年一年間の新規 HIV 感染者／エイズ患者の報告数は「2 日に 1 人」の割合である」の 12.0%、「11. 平成 20 年以降、HIV 検査を受けた人は減少している」の 19.6%、「3. 性感染症に感染していると、HIV に感染しやすくなる」の 28.6%の順であり、発生動向に関する知識や感染リスクに関する知識の普及が必要である。

特に 20 歳代では「1. 通常の HIV 検査では、感染から 2～3 ヶ月以上経過しないと、感染しているかどうかかわからない（表 2-1）」、「8. HIV 検査では、感染して症状が全くない場合でも、精液や膣内分泌液には感染源となるウイルスが含まれている（表 2-2）」といった HIV 検査に関する知識が低かったことから、HIV 検査に関する知識を普及する必要性が高いと考える。

20～24 歳では「9. HIV 感染の予防はコンドーム使用が極めて有効である（表 2-3）」の感染予防に関する知識が低く、青少年における感染予防策の普及が必要である。

（3）相談機関や大阪市等で作成した周知媒体の認知度

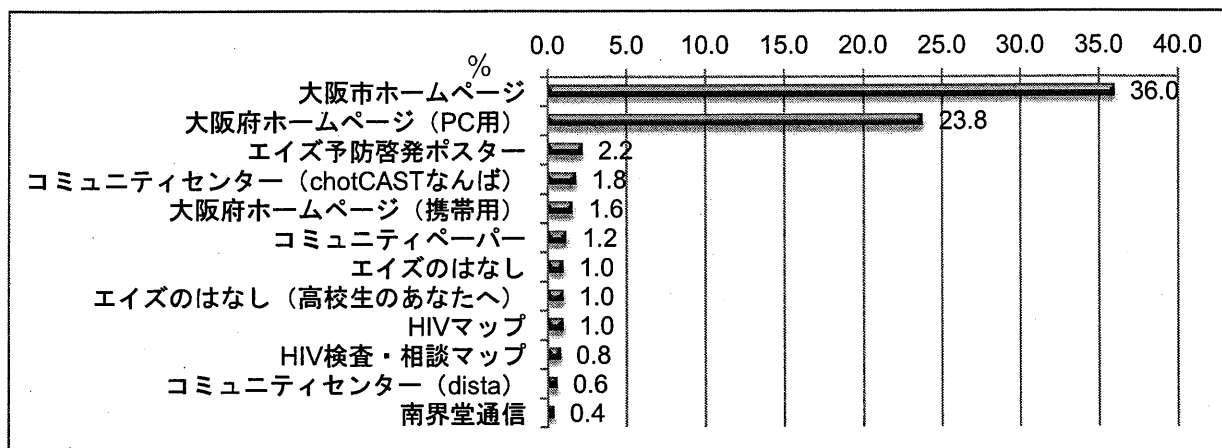
・「HIV や性感染症について、相談できる場所（電話相談など）」を知っている人は 22.6%（113 人）で、知らない人は 77.4%（387 人）であった。【問 4】

・「大阪市等で作成した周知媒体を見たり、場所に行ったりしたことがあるか」【問 17】については、図 3 のとおりであった。「大阪市ホームページ」が 36.0%と最も多く、周知の機会として大阪市ホームページの充実を図ることが有効である。「エイズ啓発ポスター」は調査当時、市内中学校・高等学校・各区役所・図書館・主要地下鉄駅構内・セブンイレブン等に掲示していたが認知度は低く 2.2%であった。中学校の生徒や高等学校の学生は本調査対象ではなかったが、さらにメッセージ性のあるポスターの作成や、掲示場所を工夫する等の改善が必要である。

「コミュニティペーパー」及び「南界堂通信」は商業施設を中心に関係団体が設置・配付をしており、MSM をターゲットとしている。MSM の 2 割に「コミュニティペーパー」は認知されていたが、「南界堂通信」を認知している者はなかった。

HIVに関する地域の情報センターである「コミュニティセンター」の認知度はHIV検査を実施している「chot CAST なんば」が1.8%、ゲイコミュニティの中にある「dista」が0.6%であった。

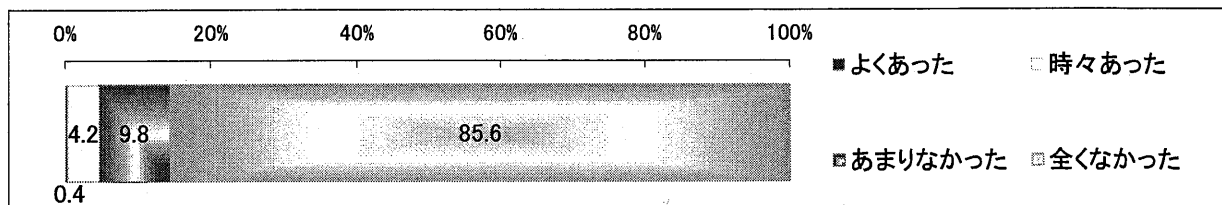
図3 大阪市で作成した周知媒体等の認知度



(4) HIV検査に関すること

・「過去6か月以内に『HIVに感染しているかも…』と不安に感じたことがあるかどうか」については図4のとおりであった。【問6】

図4 HIV感染不安の有無



・「HIV検査の生涯受検経験」については、「ある」が12.6% (63人)、「ない」が87.4% (437人)であった。【問7】

・上記の63名に受検時期を聞いたところ、「1年未満」が19.0% (12人)、「1年～3年未満」が25.4% (16人)、「3年以上前」が55.6% (35人)であり、3年以上を経過している人が多く、現在の感染の有無を確認できている人は少ないと考える。【問8】

・「HIV検査を受けた理由」については、表3のとおりであった。【問9】

表3 性別 HIV検査を受けた理由

	全体	性別	
		男性	女性
人数	63人	31人	32人
女性との性的接触による感染またはその疑い	28.6%	51.6%	6.3%
男性との性的接触による感染またはその疑い	12.7%	6.5%	18.8%
注射針などの共用による感染またはその疑い	9.5%	12.9%	6.3%
医療従事者としての針刺しなどによる感染またはその疑い	3.2%	6.5%	0.0%
その他(妊婦健診等)	50.8%	25.8%	75.0%